

週日の説教

金 大烈 神父 2010年3月26日(金)

《 “間違い” と “違い” 》

馬の仲間に、黒い線と白い線が混じっている馬がいます。“シマウマ”ですね。黒人に“シマウマ”について説明してもらおうと、「黒地に白い線が混じった馬です。」と言います。同じことを白人に説明してもらおうと、「白地に黒い線の混じった馬です。」と言います。では、“シマウマ”に聞いてみると「混じったのではないよ。これが本物だよ。」と言うのではないかと私は思います。

日本の小学校ではどのように教えるのか知りませんが、韓国では20年ほど前からなくなった言葉があります。それは『肌色』とか『皮膚色』、『肉色』という言葉です。今は『あんず色』と言います。なぜならば、20年くらい前からいろいろなアジア系の国の人々が入ってきて、『肌色』というと子どもたちが迷ってしまうからです。自分の肌の色は黒なのに『肌色』は違う色だと、選ぶときに迷ってしまうからです。“これは子どもを迷わせるし、差別になる可能性もある”ということで母親たちが「変えましょう。」という意見を出し、韓国の文教部(日本の文部科学省)で『肌色』とか『肉色』という言葉を使わないように決めたのです。ですから私の世代の人々は、『肌色』と言えばすぐにわかりますが、今の子どもたちには分からないのだそうです。これは正しいことだと思います。

『間違えたこと』と『違うこと』は異なりますよね。しかし私たちの愚かさを振り返ってみると、『違うこと』を『間違えたこと』と錯覚してしまう場合が結構あるのではないのでしょうか。皆様もそうではありませんか。『違うこと』は罪ではありません。『間違えたこと』は、やり直さなければならぬことです。しかし私たちは、それを混同してしまいます。『間違えたこと』と『違うこと』を一緒にして、全部「これは間違えたことだ。罪を犯したものだ。」とってしまう傾きがあります。だから、お互いに理解しないで攻めようとしてしまいます。それが人類の歴史だと私は思います。たとえば、ある大きい文化が、幸せに生きている別の文化の人々に「あなたたちは間違えています。」と言って、無理矢理に自分たちの文化を入れ込もうとすることは大きい間違いでしょう。

さあ皆様、今日の福音(ヨハネ 10・31-42)をよく考えてみると、二つのポイントがあると思います。

一つは、「わたしは、父が与えてくださった多くの善い業をあなたたちに示した。その中のどの業のために、石で打ち殺そうとするのか。」という言葉です。すると人々は、「善い業のことで、石で打ち殺すのではない。神を冒瀆したからだ。」と答えました。そこでイエス様は、彼らが持っている律法をたとえとして、簡単に説明します。しかしその人々は、それを受け入れずに、やはり捕らえようとしてきました。そこで「イエスは彼らの手を逃れて、去って行かれた。」と聖書には書かれていますね。

さあ、『神様を冒瀆すること』とは、何でしょうか。イエス様が考える『冒瀆』と、イエス様を殺そうとしている人々が考える『冒瀆』の意味は、全然違ってきます。イスラエルの人々が、神様に対して忠誠心、強い心を持っているのは自然で、間違いではありません。しかし、神様に差し上げる心と

形が、「自分の考えるものと違う」と思ってしまったから、イエス様を殺そうとしました。そしてその内面には、もっと卑劣な思いが隠れています。それは自分の立場を失う恐れです。悪いことをする人たちは、いつも表面的には人々を説得できるような話をします。しかし、そういう偽りのある振る舞いや心は、必ず真実に負けることを私たちは理解しなければならないと思います。

二つめです。イエス様は去られた後、最初に洗礼者ヨハネが洗礼を授けていたところに行った、と書いてあります。そしてそこには、たくさんの人々が集まりました。正義を行おうと頑張る人たちが権力者たちから追い出されるところは、今の時代と全く同じではないでしょうか。そして、逃げなければならない人々が、完全にこの世から追い出されるのではなく、その人々を支持し、支え、ついてくる人々も結構います。ここで私たちが考えなければならないのは、“イエス様のところに集まった人々は、100パーセント、自分の罪について心を痛めた人だった”ということです。そして何よりも、自分の弱さを認めるしかなかった人々でした。社会的な権力も、お金も、頼るものもない人々が、最後の希望としてイエス様の周りに集まったのです。ですからすぐにイエス様のみ言葉が刷り込まれました。今まで聞いたこともないメッセージ、温かいメッセージを伝えるこの人ならば、「ついて行っても裏切られないだろう。」という思いを持って、イエス様の周りにはいつも人々がいました。

さあ、彼らの心と私たちの心は同じではないでしょうか。これは心の世界の話です。私たちは弱さを認めています。そして自分の人生のいろいろな罪も分かっています。誰の評価であるかは、大事なことはありません。自分が自分を評価したとき、「これは神様の心を痛めたところだ。」と認めているのが私たちではないでしょうか。「いろいろなことを言われても、それは私には大事なことはありません。み前にひざまずいたら、私は罪人です。それを認めます。しかしその罪人にもこのように神様が悔い改める機会をくださることを考えてみると、感謝の気持ちでいっぱいです。」このような思いが、私たちを立たせるのではないのでしょうか。

皆様、もう一回、考えてみましょう。『違うこと』は絶対に罪ではありません。もちろん違うことで罪が起こるかもしれませんが。しかし同じものを見る目が違からと言って、罪とは言えません。『間違い』と『違い』は異なるのです。

ありがとうございました。